

### 第Ⅲ章

## 城と人の歴史



三の丸御本城鶴の間(上の間)CGによる復元  
(欄間は画題が不明のため、おさ欄間とした。また、天井のかざり金具は検討中)  
CG制作 福井工業大学 FUT 福井城郭研究所 多米淑人  
障壁画作図 川面美術研究所

## 姫路城の歴史

### 姫山の城

#### ■伝説の山に「城の影」— 通説は「赤松築城説」だが…

城郭の立地は、まず峻険な山上に築かれた「山城」から始まり、最終的には平地に建つ「平城」へと変化していくが、その中間に「平山城」がある。現在の姫路城は、この平山城の代表で、標高45.6mの姫山山上に建っている。

姫山の地名起源は、8世紀初めに成立した『播磨国風土記』が伝える「14の丘伝説」にさかのぼる。父子神の争いによって破壊された船の積み荷が天空に舞い上がり、それぞれが落ちたところが14の丘の名になって今に残っているのだが、そのうち「蚕子」が落ちたところが「日女道丘」とされ、それが姫山となったとされる。

ここに、いつから「城」が出現するのか確認されてはいないが、従来、語り伝えられているのが赤松築城説である。1333（元弘3）年、鎌倉倒幕の兵を挙げた西播磨の豪族、赤松円心が京への進軍途中、姫山の重要性に着目、進軍拠点を置いたあと、二男・貞範に城を築かせたというものである。時期は、1346（正平元）年、または1349（同4）年、南北朝の動乱期に当たる。後に編まれたという海老名文書や、姫路の古刹・正明寺（称明寺）の板碑



正明寺の板碑

をもとにした説で、初代の城主を赤松貞範とする。

貞範の「城」があったなら、どこに建てられたのだろうか。「蚕子」が落ちたという姫山は、東の太い峰と（姫山）、西の細い峰（鷲山）とが連なる「勾玉状」になっている。現在の城は、東の峰に天守群、西の峰に西の丸が展開しているが、昭和の大修理の際に行われた天守群地下の発掘調査では、1581（天正9）年に羽柴秀吉が建てたとされる城郭の痕跡は確認されたものの、それ以前の遺構は見つかっていない。もし、それ以前に姫山の東西いずれかの峰に「城」があったとするなら、西の鷲山が城地だったと考えられている。

こうした従来の考え方—通説に対して、姫山に「城」が確認できるのは16世紀半ば以降とする見方—新説がある。正否を決める本格的な発掘調査が待たれている。（中元）

### 秀吉の築城

#### ■「石を畳んで山を包み…」— 聳え立つ3層の天守

歴史資料に照らして、確実に「姫山の城」が築かれるのは16世紀半ば、とするのが姫路城起源論争における新説である。1555（天文24）年には姫山には城は無く、1561（永禄4）年には城の存在を示す2通の土地売券が姫路の正明寺に残っていることから、この間に姫山に城が出現しているという説だ。この説によると時の城主は、官兵衛の祖父で姫路・黒田家の初代当主、重隆となる。

後に編まれた『黒田家譜』に「永禄（時代）の新城」として城のあったことが記されている。時代的にはこの城を指すとみられる。二の丸に城主の居館があり、周囲には雁木が巡らされ、石垣、塀、堀、櫓などの構築物や、門の存在にも言及しており、『家譜』が事実なら、本格的な建造物であったことがうかがえる。城地は不明だが、西の丸と推定される。

黒田家は、官兵衛の代になって、中国・毛利氏征討のため播磨入りした羽柴秀吉に、戦略拠点として姫路城を「無償提供」したとされる。それを受けて秀吉は、新たに姫路城を築くのである。

この秀吉の姫路城は、昭和の大修理時の地下調査等によって、ほぼ現天守群に重なる位置に建っていたことが確認されている。「永禄の新城」から東へ城地を移動させたようだ。発掘で、焼き板、瓦、塗り込められた比較的短い柱群などが出土しており、板張りの黒い城で、西国初の3層天守を持つ望楼型の城だったことが分かる。広範囲に石垣が積まれたようで、現在の城の南東部・上山里下など各所に秀吉時代に築かれたとみられる古い「野面積み」の遺構が残っている。

秀吉の城について『豊鑑』には「石をたたみて山をつつみ……やぐらどもあまた造り、天守とかやとて組み上げ高くそびやかし……」とあり、また『播磨鑑』では「三重の天守を築き」と記され、城の規模や、聳え立つ天守の様子などがうかがい知れる。

秀吉の築城は、歴史的にも強烈な印象を刻み、江戸期を通じて「姫路の城は秀吉の城」という「誤認」も生じるのである。（中元）



秀吉築城の姫路城、復元模型  
姫路市立城郭研究室提供

## 「播磨宰相」池田輝政と池田氏

### ■輝政以前の池田氏

池田輝政の父恒興<sup>①</sup>は、織田信長配下の武将として知られている。織田家との縁は、恒興の母養徳院が信長の乳母であったことに由来する。岡山藩士斉藤一興が池田氏歴代の事跡を記した『池田家履歴略記』（以下「履歴略記」と略す）は、幼少の信長（吉法師）が「乳母の乳房を噛みやぶるので、度々乳母を替えるも、養徳院が付くと噛まなくなった」とするエピソードを伝えている。話の真偽は置くとして、養徳院は信長から直接所領を拝領して「大御ち様」（大御乳）と後々まで敬われた。信長没後も秀吉・家康から厚遇される立場にあった。

こうした経緯から、池田恒興は信長の乳兄弟として成長し、1545（天文14）年10歳の時、信長の父、信秀の小姓となり信長の遊び相手に見出された。元服したのちも信長に臣従し、姉川の戦い、長篠の戦い、摂津花隈城攻め（輝政初陣）に戦功があった。信長没後は羽柴秀吉・柴田勝家・丹羽長秀と共に後継政権の四宿老に列したとされている。1583（天正11）年秀吉が近江国賤ヶ岳に柴田勝家を滅ぼすと、池田氏は摂津国から先祖の地美濃国に所領を替え、恒興は大垣城主となり、嫡男元助<sup>②</sup>は岐阜城、二男輝政は池尻城を守備した。

1584（天正12）年3月、信長次男の信雄が徳川家康を味方につけ、尾張北部で秀吉軍と交戦状態になると、秀吉配下でありながら織田家の筋目となる池田隊中はどちらに組するか意見が分かれたという（「履歴略記」）。秀吉と家康の唯一の直接対決となった小牧長久手の戦いである。秀吉に味方した池田隊は、岡



池田輝政画像 鳥取県立博物館所蔵

崎攻略を目論む「三河中入り」を献策し、秀吉の甥三好秀次（孫七郎）に率いられたが家康軍に見抜かれ、4月9日に恒興と嫡男元助、恒興の娘婿森長可が討死する大打撃を受けた。その凄惨な場面は「小牧長久手合戦屏風」（大阪城天守閣蔵）に描かれているほか、「東照宮縁起絵巻」第1巻の最初には恒興討死の場面を描いて秀吉軍を打破したことが征夷大將軍として江戸政権を樹立する足がかりになったことを伝えている。

恒興・元助の戦死は家中に大きな動揺を

もたらした。戦の2日後、秀吉は少なくとも3通の書状を養徳院、輝政、池田氏の老臣土倉氏に送っている。養徳院には勝入（恒興）と元助親子の不慮の死を悼み、残った輝政・長吉の取立を約束した。恒興・元助の家臣団は、すべて輝政に付属させたいと述べ、自分（秀吉）を死んだ恒興と思ってほしいと慰めた。

輝政に対しては、戦で負傷した手傷を見舞い、家臣団の団結、武具・道具類の取りまとめ方などを指示。土倉四郎兵衛には、恒興同様に輝政を取り立てるので下々の家臣に至るまで輝政に仕えてほしいとし、家臣の身の上は秀吉が保証すると強調した。池田家の難局は秀吉の采配で対処されたことがわかる。にわかには輝政は一族を率いる立場になったのである。

### ■家督以前の輝政

池田恒興の二男輝政は1564（永禄7）年12月晦日（29日）尾張国清洲城に生まれた（一説では11月晦日）。母は荒尾美作守善次の女でのち善応院という。幼名は古新、のちに幸新、その後三左衛門と称した。1573（天正元）年9月、信長は父恒興宛の朱印状で知行地を幼少10歳の「息古新（輝政）ニ譲与」している（岡山大学附属図書館蔵）。初陣は1580（天正8）年荒木村重の摂津国花隈城攻めで、父恒興に従い諏訪か嶺に陣を構え、三須五郎太夫との格闘を伝えている<sup>③</sup>。信長は花隈総攻撃の前に5人の与力を恒興家臣団に付けて強化を図っている（『信長記』）。

1582（天正10）年6月2日、本能寺で信長が倒れると、池田恒興は羽柴秀吉に従い高山右近らと明智光秀追討（山崎の戦い）の先鋒に列した。同年10月15日、秀吉が京都大徳寺において挙行した信長の葬礼では、輝政（当時20歳）は信長の四男秀勝（秀吉養子）と共に棺をかついだと伝えられ、信長亡きあとも一定の位置にあることが確認される。

### ■家督以後の輝政

先に見たように、輝政は1584（天正12）年4月9日の長久手の戦いにおける父・兄の戦死で大きく立場をかえた。秀吉は同月28日に輝政と重臣の伊木・土倉・片桐・和田らを楽田城に召し寄せ、次のように述べたという。「勝入（恒興）の居城大垣を輝政に与える。輝政は年が若いので老公の清兵衛（伊木氏）を恒興同然に思いなさい。家老らも清兵衛の指図に違背なく従い、輝政に忠勤しなさい」と（「履歴略記」）。秀吉はこの日正式に輝政を後継者に指名した。輝政自身もこの頃より「照政」を名乗り、姫路城主となった後も同様であった。「輝政」とす

るのは1607(慶長12)年のことである。

5月3日輝政は長久手の戦いで戦死した白井藤丸の遺族「白井一心老人」(父親か)という人物に次のような書状を送り見舞っている(鳥取県立博物館所蔵「佐橋家文書」)。

去四月九日、尾州合戦之節は父子始家人共廿余人戦死の事、藤丸も其中二候、愁傷察申候、我等も父子の最期の次第察可給候、此度恵林和尚より使申入候、猶期後音候条、不能具候、恐々

五月三日

照政様御名在御判

白井一心老人

後継者として最初の務めは本書に見られるように、遺族への御悔みではなかったかと想像するが、「我等も父子の最期の次第察可給候」とあるように輝政の複雑な心理も汲み取れよう。本書は写しながら、現在確認されるもっとも古い輝政の発給文書である。

輝政は父の遺領を継いで先ず大垣城に入り、7月には信長由緒の岐阜城に入り10万石を領した。信長に始まり兄元助も継承した岐阜城下の楽市楽座は輝政も継承して岐阜入部早々に制札を下す。楽市楽座の制札は信長発給にかかる永禄期(1558~1570)の2点がよく知られるが、元助・輝政の天正期(1573~1592)の制札も各1点残されており一括で国重要文化財に指定されている(岐阜市円徳寺所蔵)。嫡男利隆(照直・玄隆)が岐阜城に誕生したのは同年9月であるから中川清秀(撰津茨木城主)の娘糸姫と結婚したのは小牧長久手合戦の少し前になろう(のち離縁)。その後輝政は1590(天正18)年までの6年余りを岐阜に在城する。家臣団には1584(天正12)年8月9日に初めての領知判物を与えている。目まぐるしい4か月であったに違いない。

1587(天正15)年には羽柴秀吉の命により池田の名字を改め羽柴を称した。これは名譽的な呼称ではなく正式な名字として扱うべきで、輝政は最晩年ともいえる1611(慶長16)年12月まで羽柴名字を名乗ったことが明らかにされている<sup>4)</sup>。また1588(天正16)年後陽成天皇の聚楽亭行幸の際には豊臣姓を賜り従四位下侍従に叙任された。輝政は騎馬にて供奉し、和歌を一首残している<sup>5)</sup>。

君カ世ノ 深キ恵ヲ 松ノ葉ノ 替ラヌ色ニ タクエテソ見ル

侍従豊臣輝政

1590(天正18)年輝政は秀吉に従い小田原北条氏を攻め、その戦功により三河国吉田15万2千石の城主となり、北条氏に嫁していた徳川家康の娘、督姫(良正院)を継室に迎える。督姫は家康に臣従した乾氏(のち鳥取藩家老)の家臣嶋倉氏が小田原よりつれ帰ったと伝え(伊勢御師白鬚家文書)、1594(文禄3)年に秀吉の仲立ちで結婚したと言われている。秀吉は有力家臣の輝政に家康の娘を嫁がせ、家康を牽制・懐柔しようとした。

1598(慶長3)年8月に秀吉が死去すると家康と輝政の関係は一層深まったはずである。2年後の関ヶ原の戦いでは家康方として奮戦する。豊臣恩顧の武将福島正則は、なかなか出馬しない家康に疑念を抱き、池田輝政と口論に及んだという(「慶長年中卜斎記」)。輝政が家康に近い存在であると誰もが認識していたはずで、豊臣恩顧の武将と家康の間を取り持つ役割を担ったとみられる。関ヶ原の前哨戦ともいえる岐阜城の戦いは、かつての居城であり地理・地形を熟知する輝政が先鋒をつとめ一番乗りを果たした。家康も「御手柄、何とも書中に申し尽くし難く存じ候」と書状を送っている(岡山大学附属図書館)。関ヶ原の戦い終結直後の9月23日には早くも輝政は、福島正則と連署で播州赤穂仮屋中、播州龍野惣町中などに禁制を発し、同月26日にも播州清水寺、広峰神社に禁制を与えている。一般には輝政の播磨拝領は10月15日とされているが、早い段階で決まっていたものとみられる。16日には輝政家臣団の姫路入部に際して9箇条にわたる定書を発している。家臣団に対しては、一部に11月11日付で領知判物を与えているが、大部分の古参の家臣には翌6年11月3日付で知行を充<sup>あて</sup>行っている。大多数は花押を据えるが、一部には印判(黒印)を使用したものも確認される。姫路城の築城に着手したのも諸書に従えば1601(慶長6)年に起工されたといい、1609(慶長14)年に完成したとされている。



池田輝政家臣団姫路入府にともなう定書 鳥取県立博物館所蔵

■晩年の輝政と一門

1603（慶長8）年2月、家康將軍宣下の時、輝政は従四位下右近衛権少将に任官され、当年5歳の二男忠継（藤松）に備前国28万石が与えられる。翌年には2代將軍秀忠から長男利隆（松平武蔵守）に備前支配の代行（監国）が指示され、翌年11月に利隆は自身の名（照直）で家臣団に領知判物を与えている。

さらに1610（慶長15）年には9歳の三男忠雄に淡路国6万石が与えられ、池田氏一門による領国経営が展開した。しかしながら家臣団は、輝政が没する1613（慶長18）年まで未分離の状態、岡山大学池田家文庫に所蔵される1612（慶長17）年「池田三左衛門尉輝政 播・備・淡侍帳」は、輝政に帰属する家臣団の様相をよく示している。輝政は1612（慶長17）年に正四位下に叙任され、徳川一門以外では最初に参議に任官され、同時に松平の名字が与えられた。最晩年は「松平播磨宰相」などと称されたが<sup>6)</sup>、翌慶長18年正月25日中風が再発して姫路において没した。享年五十。

「当家系図伝十」には「男山龍峯寺ニ葬ル、播州一郷（市之郷）渡リヨリ西方ニテ火葬シ、石碑ハ男山ニ建、備前ニ移セシ時海ニ沈ムト云、本多美濃守姫路城主ノ節備前ニ引取玉ヘト被申ニ依テ也」とある。輝政は市之郷村の渡しの



姫路城内家臣用屋敷割図 岡山大学附属図書館所蔵

西方で火葬された。現在、輝政の供養塔（五輪塔）のある正法寺には、明治時代の鉄道の敷設に関連して市之郷から供養塔を移したという寺伝を有することから供養塔は火葬された地にあったと概ね理解される。遺骨は男山龍峯寺に葬られ同寺に墓石が建てられた。その際に龍峯寺は国清寺と改号されたと

いうが、墓石が当地にあったこともほぼ間違いないであろう。現在不動院のある所がかつての龍峯寺・国清寺跡地である。姫路城主が本多忠政に替わったのち、輝政の墓石を備前に移送中、海に沈めてしまったという記載も興味深い。

1667（寛文7）年、備前国和意谷に墓所を造営する際、京都妙心寺護国院より「勝入様（恒興）・輝政様之御骨」を運んだことが知られている。火葬後の遺骨は護国院にも運ばれていたと理解される（「履歴略記」・「因府年表」）。

輝政の遺領相続にともない各々の家臣団には正式な領知判物が与えられる。西播磨3郡を欠く播磨42万石を相続した嫡男利隆は1613（慶長18）年11月7日。備前と西播磨3郡38万石を相続した二男忠継は同年12月4日。淡路の三男忠雄は12月20日に順次発給した。輝政は家康の娘婿という立場を背景に、確たる戦功も残して池田氏一門の地位を盤石なものにした。その後は明治維新期まで存続する国持大名として利隆の系譜の岡山池田家（岡山藩31万5千石）、忠継の家筋を継承した忠雄の系譜の鳥取池田家（鳥取藩32万石）を輩出し、四男輝澄の系譜は福本池田家といわれ交代寄合（旗本）として存続した。そのほかにも播磨国・備中国などを本拠とする旗本諸家を多数輩出している点は輝政の子孫として、池田氏一門衆として留意されるべきである<sup>7)</sup>。（伊藤）

註

- (1) 恒興は「信輝」と称される場合があるが、「信輝」の名は死去後約60年を経た1641（寛永18）年成立の「池田氏系図写」（鳥取市歴史博物館所蔵）に「恒興」と記す下に「後信輝改」と注記されたのが今のところ初出と見られる（寛永諸家系図伝）。同時代の資料に「信輝」は一例の使用も見出せない。幼少期の名は不明ながら、1580・81（天正8・9）年頃までは勝三郎と称し、以降は恒興を名乗る。1582（天正10）年信長没後は剃髪して「勝入」と号するも、判物などには引き続き「恒興」とされている。なお江戸後期の「寛政重修諸家譜」では反対に「信輝」の下に「初恒興」と注記された。
- (2) 岡山藩・鳥取藩関連の二次的編纂資料には「之助」と記されることが多いが、同時代資料には「之助」はなく、「元助」である。
- (3) 岡山大学附属図書館の池田家本『信長記』には、この戦いで信長より感状を与えられた旨の追筆が認められるとの指摘がある（金子拓『織田信長という歴史』ほか）。1641（寛永18）年成立の「池田家系図」（寛永諸家系図伝）や「履歴略記」は、「武士高名落度之事」の表題をもつ感状を載せているのであるが、感状としては異例の長さであり、追筆の指摘を考慮するならば慎重に取り扱わなくてはならない内容と考えられる。
- (4) 黒田基樹「池田輝政の発給文書について」「岡山藩の支配方法と社会構造」所載
- (5) 「当家系図伝十」鳥取県立博物館所蔵
- (6) 前掲、註(4)と同じ
- (7) 鳥取市歴史博物館『大名池田家のひろがり』『池田氏系図』などを参照

## 城下町の建設

池田輝政による姫路城の築城は、姫山を本城として縄張が行われた。『池田家履歴略記』は、姫山の下に宿村・中村・国府寺村という村があり、この3村を合わせて姫路と称していたと記している。現在の姫路城は、中世以来その場所にあった姫路の3村と福中村を合わせた4村の土地に築城されたのである。

「宿村絵図」によると、かつての宿村の村域は、東は平野町筋、西は豎町筋、北は大名町、南は飾万門から外堀を出たところまでとなっている。この宿村の地内には、本町、綿町、元塩町、豎町、西二階町、中二階町、東二階町など20あまりの町が成立し、その広さはいわゆる内町の3分の2を占めていた。また、70あまりの町を代表する「頭三町」と呼ばれた元塩町・綿町・本町も元の宿村の地内にあった。このように、城下町とりわけ町人町の建設において、宿村は中心的な位置を占めていた。

宿村の東に国府寺村、西に福中村、福中村の北に中村があった。宿村はおおよそ全域を曲輪の中に取り込まれ、国府寺村は西半分を、福中村は東半分を曲輪に取り込まれたが、中村についてはどの程度であったのか明らかでない。

榊原氏の時代に製作された「姫路藩領図」には、これら4村の内、国府寺村を除く宿村、福中村、中村について、例えば「宿村田地 村無之」と記している。国府寺村は村の本体を残すことができたことから村の機能を残して存続し、他の3村は年貢を課す田地は残ったが行政単位としての村の機能を喪失させていた。城下町の東端に国府寺町、西端に福中町という町名が残るのはその名残である。

城下町の建設により、宿村と福中村は町人地、国府寺村は町人地と武家地、中村は高禄の家臣の屋敷地・大名町となった。商人や職人の町人地は大名町の南、中堀と外堀の間に設けられた。

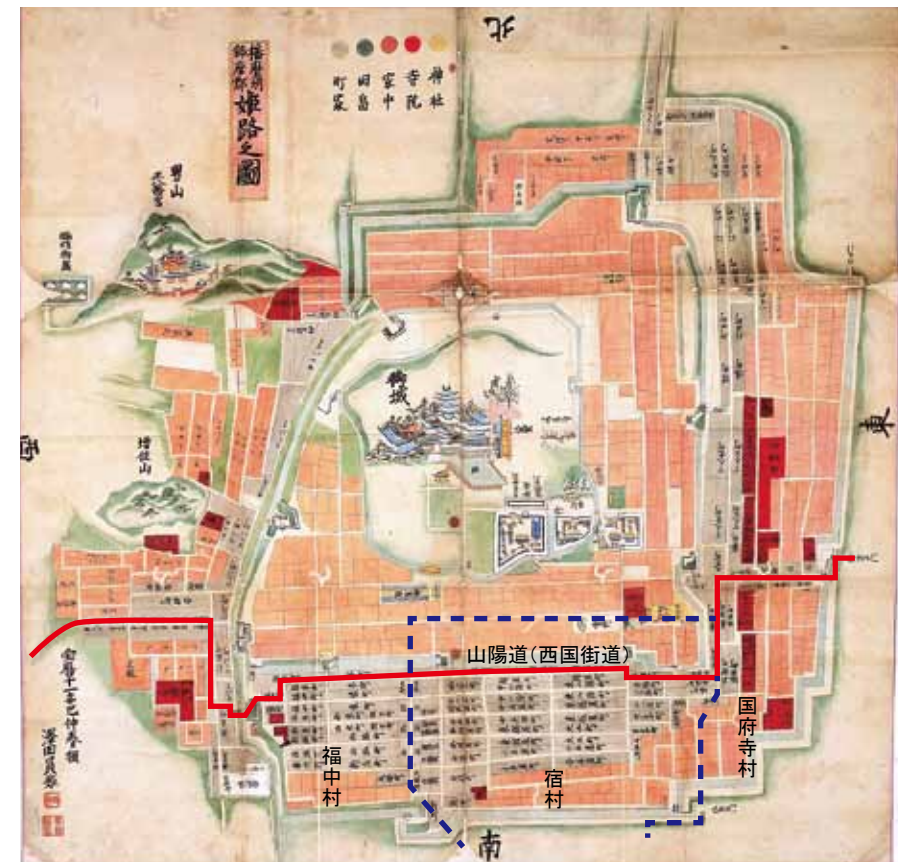
姫路は古来より幹線道路である山陽道（西国街道）が通る交通の要衝であった。江戸時代の山陽道は外京口門から姫路に入り、本町筋（後に二階町筋）を通り、備前門を出て、龍野町から西国へと向かった。姫路城の築城により山陽道の整備は進められたと考えられるが、城下町となった国府寺村、宿村、福中村は山陽道が通過する場所に位置した村々であった。

池田輝政による城下町の建設にはいくつかの特色がある。城絵図からも明らかのように、東と南の奥行きは深く、西と北は浅いことである。東は、山陽道から姫路の町へ入る重要な場所であり、また、姫路と但馬を結ぶ但馬道の起点

でもあった。その場所の重要性は外京口門が設けられていることから明らかである。山陽道と但馬道沿いには町人地が展開するが、基本的に武家地であったことは、姫路防衛の要地であったことを窺わせる。南は、宿村が山陽道に宿場の形成されていたことに由来する村名であることから分かるように、街道筋に在郷的に発展した村々を町人地として曲輪に取り込んでいたことである。

奥行きのある山や川などの地勢により影響を受けるが、姫路城の城下町建設において、東と南の奥行きは深さは姫路城の防衛と経済を強く意識したものであった。

(小栗栖)



姫路の城下町を通る山陽道（西国街道）と中世の村の位置（青い破線が宿村の範囲を示す）（『播磨州飾磨郡姫路之図』（姫路市立琴丘高等学校蔵）をもとに作成）

『村翁夜話集』によれば、寛永（1624～43）の頃に姫路城の堀浚えが行われ、その土で道を修繕した。泥土であったため、人馬は通行に困り、本町から俵町・福中町を往来するようになった、と記されている。

## 本多忠政の整備

### ■西の丸の整備・補強

1617（元和3）年、池田利隆が没し嫡男光政が跡を継いだ。7歳という若年では西国の押さえは無理と判断され、因幡国鳥取へ移封された。その後、西国の押さえの要である播磨を任されたのは徳川四天王の一族本多氏であった。

伊勢国桑名から25万石で入封した忠政は、池田家が手がけた姫路城のまだ足らざる部分を補てんしようと、まず西の丸の整備に着手した。姫路城が立つ姫山は西の男山・景福寺山より低く戦略上の弱点を有していた。忠政はさっそく幕府に「男山の方の石垣をかさ上げし、多門をつくりたい」と願い出た。

大坂の陣で豊臣氏が減ぶと、幕府は大坂を直轄地とし、大坂周辺を譜代大名で固めることで播磨以西の大名に備えようとした。大坂城の西、尼崎・明石・姫路を一体化させる構想のもと、本多忠政に明石新城の築城を指揮させ、姫路城西の丸の整備・補強を許可した。姫路城はもはや「西国将軍」の牙城でなく、幕府のために働く「西国探題」の城と化したのである。

### ■千姫の居館建設

姫路城を与えられた本多氏の25万石のうち、10万石は忠政の嫡男忠刻の室千姫（将軍秀忠女、家康孫）の化粧料であった。忠政はこれを忠刻・千姫の居館建設に充てた。本丸の西の丘（鷲山）にあたる西の丸は岩盤上斜面に土を盛った台地で、外は断崖で堀が巡り、石垣が積まれていた。忠政はこの南北両端に櫓を築き、中間に5つの二重櫓、多くの渡櫓、長局、多門を設け、城壁を巡らせた。居館は西の丸中央に築かれ、書院造で善美を尽くし、台所にも門を構えたという。

北の端櫓は竿縁天井を張り、化粧長押にも釘隠をうち、床の間を設け、畳を敷き詰めた。千姫が朝夕、男山の天満宮を遥拝する時、服装を正し化粧をしたので「化粧櫓」と称したと伝えられている。長局は本部屋と控部屋を有し、部屋の壁には窓が取り付けられ、廊下の外壁には窓の他、狭間・石落とし等の防備が施された。

### ■御本城および水運の整備

忠政は西の丸の南、三の丸の西の台地に新たな居館を築いた。書院造で、表玄関・内玄関・用人詰所・溜の間・使者の間・応対の間・時計の間・蜜柑の間・

雁の間・虎の間・鶴の間・黒書院・新小書院・居間・台所・湯殿等があり、部屋によっては戸襖に金箔を置き、緑青でいろいろな絵が描かれた（第III章扉の復元CG参照）。雁の間・虎の間・鶴の間等の名は戸襖にあった絵から付けられたのであろう。中でも鶴の間は二部屋および入側合わせて151畳という大広間で、大規模式典や儀式に対応した造りとなっていた。忠政は備前丸にあった居館を本丸下のより広い三の丸に移し、政務・居住性を重視した「御本城」として整備したのである。

一方、千姫は自ら居住する西の丸が御本城より上に位置していることを慮り、御本城前の低い位置に下屋敷を設け移り住んだという。この下屋敷も金箔・銀箔・緑青が施され、居間をはじめ多く部屋には薄の絵等が描かれ、武蔵野が偲ばれたので、世に「武蔵野御殿」と称した。これらの建造には徳川家から伏見城の建物の一部が与えられ、建具等もそのまま利用したとの伝承が古老の間に残っている。

忠政は三の丸中央に庭園を設け、数寄屋を建てた。茶席、水屋、広間等を備え、一本柱の唐笠の間を建てた。庭園には築山、泉水を配し、日向松、宮城野の萩、三河八ツ橋の杜若を植えるなど、数寄を凝らした。御本城の真向かいになるので「向屋敷」と称した。この他にも、忠政は絵図ノ門の外に東屋敷、御本城の西、内堀を隔てて西屋敷を配した。

こうして忠政は姫路城を、幕府のための武備の城というより、藩のための政庁・居館の城という、元和偃武にふさわしい形に変えていったのである。

忠政はまた、輝政が城下から節磨港に通じる運河の建設に成功しなかったことを鑑み、姫路城の西を流れる妹背川、三和川などを節磨港に通じる河川として修め、高瀬舟による貨物輸送を始めた。城下の船着場はたちまち市が立ち、市之橋、市橋門、船場川という名が生まれたのもこの頃で、姫路城の西側には材木町、小利木町等、新たな町が生まれ、大いに繁盛したのである。



（富士本）本多忠政画像 本多隆將氏蔵

## 堀と石垣の普請

### ■らせん状に巡る堀は全長 10km

姫路城の堀は内曲輪の八頭門の脇を起点にして野里町の堀留までらせん状に巡り、全長 10km にも及び、堀の水は湧水と市川水系から水路をとおして供給されていた。野里門西側や清水門は湧水が豊富で、明治以降も水道水などに使われた。姫路城が扇状地に立地するという自然条件を顧慮して堀も築かれたのである。

池田時代、妹背川を利用して中堀とした。本多時代になると、姫路城－飾磨津間の舟運を妹背川改修によって実現するため、現在「千姫の小径」と通称する土堤を築き、中堀を川と分離させた。これによって姫路城と瀬戸内海が舟運でつながり、妹背川も船場川と呼ばれるようになった。

水堀は土塁上の樹木の落葉や流入する土砂で、浚渫をしないと埋まってしまう。埋門から中ノ門にかけての中堀では、寛永頃、浚渫土を本町から坂本町にかけての西国街道の路面に盛ったところ、路面がぬかるみ往来に支障を来すことになった。以来、人の往来が西国街道の 1 本南の二階町の通りに移ってしまい、近代になっても西国街道が人気を取り戻すことはなかった。

### ■時間も経費もかかる石垣修理

江戸時代は、石垣や土塁など土木構築物の修理には幕府の許可が必要であった。そのため修理にかかる文書の作成が必須となるので、石垣修理の履歴は史料として残ることになる。姫路城でも、多くの石垣修理が行われたことが史料より明らかになっている。それをみると、幕府の許可が出ても、すぐに修理が行われるとは限らなかった。とくに松平明矩時代に許可が出た箇所が、酒井時代に再度申請され、結局、修理完了まで 74 年も要した例もあった。当時は朝鮮通信使応接や一揆の多発で財政・治安に問題を抱えていたため、修理をしている余裕などなかったのだろう。結果的に先延ばしとなって、松平家と交替した酒井家が処置することになった。

このように石垣の修理は幕府との交渉という煩雑さもさることながら、解体して積み直すとなれば時間と経費を要する工事であった。城主には忌避したい仕事であったにちがいない。二の丸のいわゆる「補足石垣」は、高石垣の孕み部分を押さえるように築かれている。手間を省くために工夫された石垣修理痕跡の事例である。

(工藤)

## 歴代城主——江戸期通じ全国最多の城主 特異なポスト

姫路城に在城した城主の数は、全国最多を数えると同時に、他城には見られない特異な城主群像を確認することができる。城主の多さや特異性は、取りも直さず、姫路城の特異性、歴史的重要性、価値をも物語っているのである。

まず、城主の数から見てみよう。城主人数の数え方は、城の起源が諸説あるため、確定しづらいのだが、江戸期を通じての数だと正確な資料に基づいてカウントでき、他城比較も可能となる。ただ、多くの城郭は、守護大名や国人の居館を起源としており、城主数という点、これら江戸期以前の「主」もカウント対象となる。こうした点を踏まえ、姫路城における城主の数を検証してみたい。

### ■江戸期の城主は 32 人

姫路城の起源について、仮に、通説—赤松説に従うと、赤松貞範を初代として関ヶ原時の木下家定まで 16 人。黒田氏の築城を起源とする新説では黒田重隆から木下家定まで 6 人となる。この後、江戸期の城主が続くのだが、姫路市史等では、関ヶ原後に入封した池田輝政を江戸期初代姫路城主として、幕末の酒井忠邦まで 31 人を挙げている。しかし、もう一人、加えるべき城主がいる。榊原政倫である。

政倫は、先代城主で父の榊原政房が急死したのに伴い 3 歳で榊原家の跡を継

歴代姫路城(藩)主

城主家	城主
江戸期以前	(通説) 赤松貞範—小寺頼季—景治—景重—職治—山名持豊—赤松政則—小寺豊職—政隆—則職 (新説の城主へ) (新説) 黒田重隆—職隆—孝高—羽柴秀吉—秀長—木下家定
池田	輝政—利隆—光政
第 1 次本多	忠政—政朝—政勝
松平 (奥平)	忠明—忠弘
第 1 次松平 (結城)	直基—直矩
第 1 次榊原	忠次—政房—(政倫)
第 2 次松平 (結城)	直矩
第 2 次本多	忠国—忠孝
第 2 次榊原	政邦—政祐—政岑—政永
第 3 次松平 (結城)	明矩—朝矩
酒井	忠恭—忠以—忠道—忠実—忠学—忠宝—忠顕—忠績—忠惇—忠邦



いだが、約1カ月の空白を経て、越後村上に移封させられる。彼が、姫路城主になったのか、ならず即移封したのか、判然としない。幼少城主は、通例、家と城主を継いだうへ他藩への国替えとなるが、政倫もそのような処置がとられたとみて、これをカウントすると江戸期の姫路城主は32人。通説を加えると48人。他に例のない人数である。

江戸期を通じて存立した150余藩における城主数は、筆者の調査によると、最少は九州・高鍋藩の10人、多いところでは、古河藩28人、掛川藩27人、平均16人である。これに対し姫路は、実に平均の2倍、2位の古河を大きく離して最多を誇る。

### ■要衝・姫路—幼少城主はすぐ転封

最多城主になった背景には、姫路の立地が大きく関係している。池田輝政が「西国将軍」と呼ばれ、その後の城主も「西国探題」と称されるなど、姫路は、西国からの反幕府軍を食い止める最重要拠点と位置付けられた。ここには、幼少の城主は置かないという不文律ができる。幼少城主の国替えは、池田輝政の孫・光政が最初で当時8歳。すぐに鳥取へ移封される。跡を継いだ本多家では「馬の乗降ができぬ者に姫路城主は務まらぬ」として、3代目で姫路からの移封を申し出た。こうした慣例を経て、前任城主の急逝等によって幼少者が姫路で家督を継ぐと、即座に国替えが指示され、城主が次々と交代している。幼少で転封した城主は、実に8人にも上る。加えて、物成りのいい播磨に入ることは、藩財政の改善に大きく資することとなり、例えば、酒井家のように姫路への国替えを希望する大名も多く、城主数の増加につながった。

### ■特定大名が交互に入封—二度城主を務めた人も

特定の譜代大名だけに姫路城主を命じたことも、その特異性を物語ってい

る。江戸期初代城主の池田輝政は、外様だが、徳川家康の女婿として、厚い信頼を受けている。池田以後も、この最重要拠点都市には、最も信頼できる譜代、親藩を次々と入封させた。まず本多忠政——家康を支えた四天王の一人・本多忠勝の嫡男。3代後の松平（奥平）忠明は、家康の外孫。2代を経た松平（結城）直基は家康の孫。さらに2代後の榊原忠次は、四天王・榊原康政の孫である。

いずれも、徳川幕府にとっては代えがたい名家の実力者ばかりだ。これら有力大名が繰り返し、姫路城主におさまった。江戸後期には、これも四天王一族につながる酒井家が姫路入りする。このように姫路は、四天王を軸とした譜代、親藩で強固に固められた異例の「佐幕藩」として政権を支えることになる。

この間、本多家が二度、榊原家も二度、松平（結城）家は三度も姫路入りしている。頻繁な交代の結果、例えば松平直矩などは二度も姫路城主の座についている。同一家、同一人物が何度も城主を務めたという城は、どこにもない。

### ■家紋入り瓦の“展示場”

城主の多さなど、姫路城は極めて異例の城なのだが、こうした名門大名の足跡を刻んだのが、多様な瓦だ。池田家の揚羽蝶、本多家の立葵、榊原家の源氏車、酒井家の剣酢漿草——と名家の家紋の展示場と言っていいほどに、さまざまな文様を刻んだ瓦が残されている。

(中元)



池田氏 揚羽蝶紋

本多家 立葵紋

榊原氏 源氏車紋

酒井氏 剣酢漿草紋



姫路城内曲輪立面（総社門あたりから）  
CG制作 千葉大学大学院 加戸啓太

## 酒井忠績と姫路藩の幕末・維新

幕末の姫路藩主・酒井忠績は、1827（文政10）年、酒井家分家の酒井忠誨の長男として誕生した。「下馬将軍」と異名を取った酒井忠清の弟・忠能を祖とする家で、忠能は1662（寛文2）年に小諸藩3万石、1679（延宝7）年に駿河田中藩4万石を領有する大名となったが、1681（天和元）年に罪を得て領地を没収され、その後復活し、5000石を賜り、旗本となった。

忠績は、はじめ甲州勤番を命じられ、その後江戸城百人組の頭として将軍の膝元を守衛する。1860（万延元）年12月、25歳の若さで死去した姫路藩主・忠顕の養子に迎えられ、姫路藩酒井家15万石を相続し、藩主となった。諱ははじめ忠順、通称は仁之助を名乗り、忠績に改名した。1861（文久元）年3月、溜詰を拜命し、雅楽頭を称する。

1862（文久2）年5月、忠績は参勤交代による帰国を許されるが、途中、失脚した所司代の代理として京都取締向きを命じられ、8月26日に正式に京都所司代代理となり、閏8月6日に所司代屋敷に入った。その後9月に任を解かれ、参内後、10月に姫路に帰城した。

12月、将軍徳川家茂の上洛にあたり江戸城の留守居を命じられ、23日に姫路を後にした。姫路に滞在すること2カ月半であった。以後、将軍の上洛中は江戸城を守った。

1863（文久3）年6月、将軍が京都から帰府すると、忠績は老中上座に補せられた。京都所司代代理となった時期から忠績は、信念として「吾等は累世（＝代々）徳川譜代の臣である。幕府と存亡を共にするほかない」と発言し、姫路藩尊攘派志士との溝が生じるようになっていった。井伊家の失脚後、忠績は譜代の筆頭格として家茂の信任が厚く、江戸幕府のなかで栄達を遂げていった。8月18日の政変後は、将軍名代として朝廷に参内し、孝明天皇から「攘夷実行、横浜鎖港」の勅旨を授かった。10月、江戸に帰ると忠績は、幕府の会計掛および海陸軍務掛を拜命し、月番老中の勤めを免除され、実質的に大老格待遇となった。11月、家茂の再上洛に側近として随行が命じられ、1864（元治元）年、家茂の右大臣宣下にあたっては事務取締を総括するなど、幕府内において影響力を拡大した。

一方、国元の尊攘派志士とは、忠績が徳川家と存亡を共にするという佐幕主義に傾斜していくことによって、対立が深まっていった。1864（元治元）年2月、上洛中の忠績に対し、家老・河合屏山が出京して抗議を行うが、このとき、屏

山一行に随行した河合傳十郎と江坂栄二郎の脱藩があり、この事件を契機として、尊攘派志士の捕縛が進んだ。忠績の命を受けた家老・高須隼人は、甲子の獄へとつながっていく志士の弾圧と藩内の肅正を進めた。屏山は、江戸の忠敬（忠績の養子）を説得せよと命を受け出府するが、江戸に着くと忠敬は亡くなり、屏山はそのまま幽閉された。

6月、将軍に従い江戸に戻った忠績を待っていたのは、老中免職の沙汰であった。姫路藩尊攘派志士の「残忍の所業」が明るみに出た結果であると思われる。忠敬亡き後、忠績は、実弟の忠惇を養子として酒井家の相続を確実にものとして、第一次長州征討に備えた。そして12月、姫路藩勤皇派志士70名を断罪する甲子の獄を断行した。

1865（元治2）年2月、忠績は大老職を拜命した。しかしこの年、列強諸国の兵庫開港への圧力が強くなり、幕府は、専決で開港を決定したところから朝廷から強硬に抗議を受け、忠績は大老免職となった。江戸幕府最後の大老となった。1867（慶応3）年2月、忠績は家督を忠惇に譲り、隠居して閑亭と号した。

その後忠績が、歴史の舞台に登場するのは、1868（慶応4）年正月、姫路城開城後である。姫路藩は、新政府によって討伐され朝敵藩となったが、5月、本領が安堵された。しかし忠績は、自らの信念として江戸において、大総督官（有栖川宮熾仁）へ、城・領地の召上げを当然のこととし、徳川家へ家臣としての随従を嘆願する。姫路藩が幕末に大きく混乱したのは、忠績のこの頑迷と評される信念が大きく影響していた。

忠績は、その後実弟の酒井録四郎方へ引き取られ、静岡に居住し余生を送った。1895（明治28）年没、享年69であった。



（藤原）酒井忠績 姫路市史編集室蔵

## 修理から見た姫路城

### ■江戸期

1609（慶長14）年に完成した大天守は幾度となく修理を重ね今日に至っている。完成後17年を経過した1626（寛永3）年には、初重腕木下<sup>うでぎ</sup>に方杖<sup>ほうづえ</sup>追補の修理を行っている。屋根の重さのため軒が下がったものと思われる。その後1645（正保2）年に屋根葺修理、1656（明暦2）年に地階大柱及び間仕切柱の根継と補強柱を挿入している。1678（延宝6）年に地階・1階梁下に支柱を加え、わずか6年後の1684（貞享元）年に1・2・4・5階に29本の支柱を、更に3年後の1687（貞享4）年に同じ階に17本の支柱を加えている。その後支柱の挿入の記録は多く残り、1802（享和2）年まで続く。築城から幕末までの約260年の間に計30件に及ぶ修理記録が残るなかで、1802年までが21件の記録で、構造補強に関するものが大半を占め、これ以降9件は屋根修理に関するものが多い。

### ■明治期

明治に入ると世情は激変し、1873（明治6）年の廃城令で多くの城が壊されるなか一旦は存城が決定されるが、1875（明治8）年には民間に払い下げられ解体の危機に直面した。しかし解体には莫大な費用を要することから難を逃れた。1910（明治43）年、一重軒が崩落したのを契機に、2カ年にわたる修理が行われることとなった。最後の修理記録が残る1861（文久元）年の五重屋根修理から1910年までの49年間空白期があった。築城後の度重なる修理記録や明治初期の写真から大天守の荒廃は相当進んでいたが、49年間の空白が更なる追



江戸・明治期の修理で補強が施された大天守内部



明治の修理前



明治修理前のイの渡櫓

い打ちをかけたことは容易に推測できる。修理内容はブレース（筋かい）挿入による構造補強は行われているものの、外観を保持する応急修理に留められた。

昭和の修理に残される工事報告書から大天守の破損状況について抜粋する。「……添柱の付加と支柱の挿入、並びに筋かいの添加が各階に施されていた。特に一、二階に対する補強は極めて著しいものがあった。」「軸部・全体に亘る建物の弛みと、基礎の沈下により、東及び南へ著しい傾斜を加えており、……」

### ■昭和期①—昭和の修理の始まり

長年にわたる老朽化により、1934（昭和9）年6月に連日続いた大雨の影響で西の丸の渡櫓からイの櫓にかけて石垣もろとも崩落した。事故発生後現場調査が行われたが、石垣・建造物ともに破損が極めて深刻な状況まで進行していることが判明し、即座に西の丸を皮切りとした修理計画が立案された。

1935（昭和10）年2月から西の丸の一部、破損の甚だしい部分の工事に着手されたが、同年8月、再度豪雨によりイの渡櫓下石垣が再び崩壊する事故がおこった。修理計画は見直しを余儀なくされ、対象を西の丸全域とし工期も1年延長された。再発した事故は関係者の危機感を煽り、城内全ての指定建造物について破損調査が実施され、1965（昭和40）年まで修理が続くこととなる。これが「昭和の大修理」の発端となる。

西の丸の修理工事は1938（昭和13）年3月に完成のあと、本丸北腰曲輪のイ～への渡櫓の修理へと続き、1940（昭和15）年3月に工事を終える。この途中の1938（昭和13）7月またも長雨により西の門南方土塀が石垣もろとも崩落し、北腰曲輪と併行して工事が行われた。1940（昭和15）年度には西の門・口の櫓と周辺土塀石垣、41年度にイのろ・にの門および周辺土塀と石垣、42年度に西の丸の残されていた櫓等に着手し、1944（昭和19）年10月に完成した。イの櫓ホップ土塀だけは、着手していたものの太平洋戦争の影響で一時中断となり、戦後の1951（昭和26）年に完成をみる。

戦後、本格的な工事再開となったのは1950（昭和25）年。菱の門からの出発となり、1955（昭和30）年までに、天守曲輪群を除く土塀・門・櫓・石垣等の修理が行われた。



昭和の大修理の発端となった崩壊

### ■昭和期②—天守曲輪群の修理

天守曲輪群は、1956(昭和31)年度から1964年度にかけ修理が行われた。1609(慶長14)年の完成から約350年を経て破損、変形は相当なものになっていた。

大天守東大柱は南東方向へ約37.7cm、西大柱も同方向へ約36.6cm傾斜し、床の不陸(平らでないこと)も中央部において約9cmの沈下を生じていた。江戸・明治期の度重なる構造補強において大天守に挿入された支柱は193本、筋かい120本に達していた。小天守の柱の傾斜は乾小天守が最も大きく16.4cm、床の沈下は約11.5cmに及んでいた。

入念なる破損調査の結果、天守曲輪群の全ての建造物は解体修理されることとなる。更に大天守に至っては膨大な建物重量を支えるためコンクリート基礎に改められることとなった。

1956(昭和31)年の工事着手から解体、基礎工事、木材加工を経て1960(昭和35)年5月に軸部組立てが完了し、上棟祭が挙行された。その後左官・屋根工事と続き、1962(昭和37)年7月より素屋根の解体が始まる。これと並行して屋根目地漆喰塗りも行われ、翌1964(昭和39)年3月に全ての仮設物を撤去し完成する。

この間大天守には必要な構造補強が施され、後補の支柱や筋かいは撤去されたが、3階東西の大千鳥破風棟を支える2本の支柱だけは残存する。

小天守等は1960(昭和35)年2月から素屋根の建設に着手し、1960(昭和35)年10月より約半年で解体工事を終えた。イの渡櫓・東小天守を皮切りに口の渡櫓、乾・西小天守・ハの渡櫓の組立てに着手し、翌年9月に完了させる。ニの渡櫓・台所は1963(昭和38)年7月16日より組立てを開始し同月27日に完了。翌年3月には全ての工事を終える。



昭和の大修理の素屋根



西大柱建方



大天守コンクリート基礎

### ■平成期

大天守を除く建造物の修理は1983(昭和58)年以降継続して行われていたが、1993(平成5)年の世界文化遺産への登録を機に「平成中期保存修理計画」が策定された。これは1994～2022(平成6～34)年までの29年間に及ぶ計画で、大天守を除く81棟の指定建造物を修理するというものである。修理の内容は漆喰の塗り直し、屋根瓦の差し替えが中心で、維持保存が図られている。大天守はこの計画の中では対象外とし、昭和の修理完成から概ね50年を目途に修理計画を検討するものとされている。

大天守「平成の修理」は昭和の修理後45年を経た2009年から2015年(平成21～27年)にかけ工事が行われた。2009年10月に現地測量に着手し、喜斎門跡の土橋補強、資材搬入構台が翌年3月に完成、2011年3月には足場となる素屋根が完成した。大天守本体の破損調査は、足場がほぼ完成した3月から始め同年11月には終えた。

2011年8月には大棟鯨瓦の解体を行ったが、傷みが進行していたために、東西2尾の鯨瓦を新調することとなった。鯨瓦は高さ186cm、重量300kgを超える大きな物で、制作は約半年を要した。また同じ頃最上層壁の傷みが相当に進んでいることも判明し、壁下地木舞もろとも取り換える結果となった。

屋根葺き作業は2011年12月、五重屋根から順次下層へと葺き進み、翌年11月に完成した。左官工事は壁木舞の入手に手間取ったが、2013年11月には全ての漆喰を塗り終えた。その後素屋根の解体に取り掛かり2015年3月には全ての工事を終えた。

主な修理内容は、屋根全面葺き直し(約2,060㎡)、壁・屋根目地漆喰塗り直し(約7,500㎡)、一部柱の構造補強である。厳しい環境下に置かれる大天守は概ね半世紀に一度、全面的な漆喰の塗り直しが必要となる。(小林)



西大柱継手(昭和の大修理)



平成の修理

## 幾多の危機を乗り越えた美しい不死鳥

1609（慶長14）年の竣工以来、姫路城は何度も修理、保存工事が繰り返され、江戸260余年の間、どうにか体面を保ってきた。しかし明治に入り荒れ放題となり、天守をはじめ各櫓など至る所で瓦は落ち、屋根には、雑草が生い茂っていた。

1873（明治6）年政府は、全国およそ250カ所の荒れた城郭・陣屋の仕分けを行い、陸軍が使う姫路城など56の城が「存城」、それ以外は一般財産として処分しうる「廃城」とした。存城とは、必ずしも保存すべき城郭ではないが、即時破却は免れ、姫路城など幾つかの名城はこうして残った。

だが、姫路城の荒廃は進む一方だった。修理の口火を切ったのが、陸軍で姫路城を管理する工兵第四方面提理代理の飛鳥井雅古少佐で、1877年、陸軍卿代理・西郷従道に天守修理を要請。翌1878年には陸軍省第四局長代理の中村重遠大佐も陸軍卿・山縣有朋に姫路、名古屋城の修理保存の上申書を提出した。いずれも受理され、近代の修理が始まった。

1908（明治41）年、姫路市民らを中心に「白鷺城保存期成同盟会」が結成された。これを機に本格的な修理が開始され、1931（昭和6）年の国宝（旧）指定につながるのである。

名実ともに「文化財」となった姫路城では本格修理が始まるのだが、やがて第二次大戦が勃発。姫路は二度、米軍機による大規模空襲を受けた。市街地が炎上する中、姫路城だけが奇跡的に焼失を免れた。焦土に屹立する天守を仰ぎ、多くの市民は生きる力をもらったという。名古屋、和歌山など数々の名城が焼失する中で、なぜ姫路城だけが残ったのか。米軍機のレーダーが内堀内の城地を市街地と認識しなかったから——など様々な説があるが、偶然の運命という言葉が最もふさわしいかもしれない。

そして1951（昭和26）年、新しい文化財保護法のもとで姫路城天守群が、城郭として初めて「新国宝」に指定された。その価値を保持するため、戦前から続く昭和の大修理が継続実施され、1964年に完成。さらに半世紀、日本初の世界文化遺産に登録され、平成の修理も終えて、`白い不死鳥`は、またよみがえったのである。



焦土のなかの姫路城  
兵庫県立歴史博物館蔵 高橋秀吉コレクション

（中元）

## 姫路城ゆかりの人物

### 黒田官兵衛（1546～1604）——軍師から進化、天下を狙って…

稀代の軍師・黒田官兵衛は、姫路城生まれとされる。姫路城の起源について議論はあるが、『黒田家譜』は1546（天文15）年、姫路城で誕生したと記す。幼名万吉。のち官兵衛孝高。隠居して如水。母・明石氏の影響で、文学少年だったという。重隆一職隆と続く黒田の系譜を継ぎ、1564（永祿7）年、姫路城主となる。

1569（同12）年、青山の合戦で、隣国・龍野の赤松政秀の大軍を、奇襲で撃破し、その名が近郷に響いた。重隆以来、御着の小寺氏に仕え、家老職にあったが「織田か、毛利か」という厳しい政治選択の中で、一人「織田支持」を打ち出す。羽柴秀吉を播磨に迎え、中国・毛利氏征討を開始した直後に、三木城、伊丹・有岡城が織田に反旗を翻す。苦境の中でも官兵衛は織田シフトを貫き、有岡城に幽閉されるが、生き抜き、奇跡の生還を果たす。

その後、秀吉の毛利攻めが本格化するが、その中で特筆すべき官兵衛の業績を3つ挙げる。①毛利征討の拠点の城を秀吉案の三木から姫路にかえさせた ②その姫路城を秀吉に無償提供した ③本能寺の変に際し、秀吉に「信長後の天下を狙え」と進言、姫路を中継点に空前の中国大返しを企図した——。この3大業績によって、姫路が天下の要衝と認知され、同時に秀吉は天下人へと飛躍する。このことが「できすぎる部下」として秀吉の警戒心をあおることになるのだが、実は官兵衛自身も、秀吉と協働する中で天下を狙っていたフシがある。

欲しかったはずの播磨を離れ、1587（天正15）年、豊前・中津城主となった官兵衛は、小田原城攻め、朝鮮出兵など秀吉の軍事行動を支えながらポスト秀吉に備えていた。秀吉が没して2年。1600（慶長5）年、関ヶ原合戦の際、嫡男で当主の長政は、徳川家康の東軍に付くが、官兵衛（隠居して如水）は、中津で私兵を募り突然挙兵する。関ヶ原がわずか一日で決着がついた後も、如水軍は、九州一円に展開、薩摩を除きほぼ制圧する。何のための戦だったのか。東軍加勢のため。東西両軍の隙を突く第三極結成のため。九州を自領にするため。九州から天下へ兵を進めるため——。歴史上、様々な憶測が飛び交うが、姫路における官兵衛の思想と行動から、やはり、天下へのまなざしが読み取れるのではないか。

（中元）

羽柴(豊臣)秀吉(1536 ~ 1598) —— 姫路城から`天下`へ飛躍

尾張の百姓の子に生まれた秀吉が、天下人になるまでには、数々の劇的な舞台が用意されていた。中でも、最重要舞台の一つとして登場するのが、姫路城である。

秀吉が、姫路城とかかわるきっかけは、織田信長の中国・毛利攻めである。信長の命を受けた羽柴秀吉は、大軍を率いて二度、播磨入りし、毛利と対峙している。1577(天正5)年と翌1578年のことだ。この間、三木の別所氏、伊丹・有岡城の荒木氏の反乱、上月城への毛利勢の攻勢と、矢継ぎ早に襲う危機を切り抜けた秀吉は、1580(天正8)年、ようやく本格的な中国攻略を開始する。

秀吉はこの時、三木城を中国攻めの拠点にしようとしたが、側近の黒田官兵衛が、地理的条件等を理由に姫路を推したという。そして、自分の姫路城を秀吉に無償提供するという思い切った策を提案、秀吉はこれを受け入れ、新たに姫路城を築いた。姫路城を拠点にすることで秀吉は、英賀、宍粟、鳥取、淡路と多方面への兵の展開が可能となった。

ことに、1582(天正10)年6月、備中高松城攻めの最中に起きた明智光秀による「本能寺の変」に際しては、姫路を唯一の中継点として空前の「中国大返し」を敢行する。秀吉は、第一次播磨攻略の際、生野鉾山を押さえたこともあって、金蔵には膨大な金銀、米蔵には大量の兵糧米があった。『川角太閤記』によると、これらのほとんどを惜しげもなく将兵に分け与え、戦意を鼓舞したという。当時、秀吉の母や正室も姫路にいたともいわれ、明智光秀との戦いにもし敗れることがあったら、家族らを介錯して果てよ、とまで留守居に指示した話も残っている。一族滅亡も想定しつつ秀吉は、乾坤一擲、姫路城から天下を目指して大勝負をかけたのである。



豊臣秀吉画像(部分) 名古屋市秀吉清正記念館蔵 木下家資料

山崎の合戦を制した秀吉は「信長後継者」としての地位を固めていく。この間、清須会議にも、賤ヶ岳の合戦にも「姫路城主」として臨んだ。そして1583(天正11)年、新築なった大坂城に移り、やがて名実ともに天下人へと上り詰めるのだが、秀吉にとっては、姫路城あってこそ「天下」だったのである。(中元)

池田輝政(1564 ~ 1613) —— 家康の女婿、`西国将軍`とも

尾張・清洲城で生まれたとされる輝政は、池田家の二男坊である。幼名・古新。成人して照政、輝政。三左衛門を名乗る。父・恒興は織田信長の重臣として摂津10万石を食んだ。石山本願寺跡の大坂城にいた1582(天正10)年、本能寺の変が起きた。池田家は「中国大返し」を敢行した羽柴秀吉に臣従、明智討伐で功を挙げた。この時19歳になった輝政は、秀吉の養子として羽柴姓を名乗る。その後、秀吉が姫路から大坂城に入城したため、恒興は美濃・大垣に移封、1584(天正12)年、運命の小牧・長久手の合戦を迎える。

この合戦は、秀吉と徳川家康の対立から起きた。結果は引き分けだが、途中、尾張北部の長久手で、秀吉側の池田・森軍を家康軍が撃破。恒興と嫡男の元助が討ち死にして池田家存亡の危機に見舞われる。が、秀吉の計らいで輝政が家督を継いだ。岐阜10万石という破格の処遇であった。

輝政に対する秀吉の評価は高く、関東に移った家康の西進を防ぐため、さらに5万石を加増、東海道の要衝、三河吉田を任される。この時、秀吉の命で「仇敵・家康」の二女督姫を娶る。督姫は、北条家に嫁いでいたが、小田原落城後江戸に帰っていたのを秀吉が政治利用。家康懐柔を目的に二人を結びつけた。これが、輝政一家康関係を、生涯にわたり強固なものにする。

1600(慶長5)年、関ヶ原合戦の前哨戦では岐阜城を落とし、東軍有利の状況を作り上げた。本戦では殿の役目を全うし、抜群の働きを見せた。その論功行賞で、大國播磨52万石を得る。2割打ち出し(増税)のほか、実弟の長吉(因幡6万石)、息子の忠継(備前28万石)忠雄(淡路6万石)もそれぞれ領地を得て、一族で100万石の太守となった。

この100万石の格で建てたのが、今の姫路城である。「美しさ」を前面に出して時代の大転換を演出し、同時に大坂の豊臣勢と西国各藩に目を光らせる。この江戸幕府最重要任務に「西国将軍」との異称もついた。思わぬ形での家督相続や、家康の女婿という`運`に恵まれたとの評もあるが、やはり異称にふさわしい実力があつたのだろう。(中元)



池田輝政像 書寫山圓教寺蔵

コラム

輝政と八天塔

1677（延宝5）年刊行の『諸国百物語』に、「播磨国池田三左衛門わづらひの事」という話がある。池田輝政が病に倒れ、姫路城で比叡山の高僧が病氣平癒の祈祷を行うと上臈が出現、高僧が剣で切りかかると鬼神に変じ、高僧を蹴り殺して消えたとか。実際に輝政は1611（慶長16）年発病、円満寺（多可郡多可町）の明覚上人らが姫路城で病氣平癒の祈祷を行った。この史実から生まれた怪談が江戸期を代表する怪談集に収められたわけだが、円満寺文書によると、明覚の前には鬼神ではなく、長壁明神が現れたとされる。そして、問答の結果、明覚が進言して姫路城の鬼門、北東の隅に長壁神社と八天塔なる建物が建立されたという。

事の発端となったのは、実は、大天守が完成した1609（慶長14）年に輝政夫妻とその母（すでに逝去）宛てに届いた怪文書だった。ほぼ9年に及ぶ城と城下町建設は、年貢の2割打ち出しをはじめ領民に大きな負担を強いた。そうした政道への不満が、天狗を名乗る者たちの怪しい手紙となったとされる。その天狗たちが要求したのが、八天塔の建立だった。松浦静山の『甲子夜話』によれば、姫路の町民たちは、歌舞伎の世界でも活躍した天守の妖怪・長壁を「ハッテンドウ」と呼んでいたらしい。輝政以来、長壁神社は代々の城主に崇敬されたが、八天塔は一体のものともみなされていたのだろう。

江戸時代後期以降、天正ごろの姫路を地誌に基づいて描いたとされる「姫路古図」を見ると、姫山に「小刑部宮」「富姫宮」の社が見える。両社は羽柴秀吉が姫路城築城に際して取り払い、後に播磨国総社・射楯兵主神社に長壁神社として祀り直した。姫路の人々が古くから信仰してきた姫山の地主神たち、その神々に対する新しい支配者の仕打ちは人々の怒りを買ひ、その矛先が輝政に向けたのが「天狗の手紙」ともいえるだろう。長壁神社の祭神、



「長壁神社遺跡」石碑(1914(大正3)年建立)

刑部大神に関しては、刑部大神と富姫明神を父娘とする説や妖狐とする説などさまざまな風聞が流れていた。八天塔建立の背景にある姫山の神々、その淵源は『播磨国風土記』に記された「白女道丘」の神にまで遡るのかもしれない。(埴岡)

榊原政岑 (1715 ~ 1743) —— 太夫身請けした「風流大名」  
松平明矩 (1713 ~ 1748) —— 失政で一揆招いた「名門城主」

榊原政岑と松平明矩。城主を評価するとき、多くは名君について語るが、この二人の場合、突出した行為が非難の対象になっている。

榊原政岑は本家の嫡流ではない。第二次榊原の二代目姫路城主・政祐が後継者のないまま急逝、庶流から養子として迎えられた。政岑18歳、わずか1000石取りが、一気に15万石の大名となった。環境の激変を乗り越え、1732（享保17）年の就封直後は、積極的な領国経営を展開していた。だが5年後、正室久姫がなくなるのと前後して、江戸の遊郭・吉原へ頻繁に出入りする。大名の吉原通いは珍しくないが、政岑は、江戸きってのスーパースターでもある「三浦屋の高尾太夫」を側室として身請け、姫路城内に住まわせてしまう。2500両という家老の年俸並みの身請け金だったという。

当時、8代將軍吉宗による享保の改革の真っ最中。儉約徹底の趣旨に反すると厳しく咎められ、政岑は即座に隠居、謹慎。榊原家は、1741（寛保元）年、越後高田へ左遷される。道中、政岑は罪人用の駕籠に乗ったという。その2年後、29歳で急逝した。高尾太夫は「殿様がこうなったのは自分のせい」として生涯、政岑の菩提を弔い続けたという。

一方の松平明矩。徳川家康直系の名門、結城松平の当主である。政岑罷免後、白河から姫路入り。豊かな播磨で、破綻状態の藩財政が立て直されると、喜び勇んでの姫路入封であった。

しかし、厳しい年貢の取り立てに加え、対象外の新田課税、室津での朝鮮通信使接待費の臨時徴収、さらには台風被害が追い打ちをかけた。積極的経済対策も掛け声だけで、領内には不満が鬱積する。明矩死去後の1748（寛延元）年12月から翌年2月にかけて、領民が一斉蜂起。加古川、夢前川、市川流域、南部海岸線を中心に、藩内ほぼ全域で9波にわたる一揆が連続して起こった。

明矩は、姫路城大天守の修復に貢献し、幕末までの100年余、倒壊を防いだとも評されるが、歯止めなき増税路線を推し進めた失政は、指弾されても仕方ない。



(中元) 松平明矩像(『姫路市史』第3巻より)

酒井忠以 (1755 ~ 1790) —— 一級の茶人大名、抱一の実兄

姫路藩に一揆の嵐が吹き荒れた後の1749(寛延2)年、厩橋(前橋)から姫路城に入るのが酒井忠恭。姫路酒井家初代の城主である。忠恭には28人もの子どもがいたが、後継となるべき嫡男忠得、二男忠宜、三男忠仰が相次いで病死してしまう。うち忠仰には二人の男子がいた。忠恭は、その嫡男つまり直系の孫を早々と自分の跡継ぎに決めた。

これが姫路酒井家二代目の忠以である。ちなみのもう一人の男子は忠因、後に「夏秋草図屏風」などの傑作で知られる江戸琳派の巨匠・酒井抱一である。

忠以は、1772(安永元)年、18歳で姫路城主になった。華麗な文化的才能を持った城主として知られ、ことに、茶道に関しては、当代きっての茶人大名として高名の松江藩松平不昧(治郷)とのユニークな書簡のやり取りなどを通じて、その道を究め、宗雅と号した。江戸城大手の酒井家上屋敷に茶室「逾好庵」を建て、諸大名、文人などを招いて盛んに茶会を開いている。亡くなる直前の3年間で200回にも及んだが、この茶会の様子を、料理、道具など細かく記録してまとめたのが『逾好日記』で、茶道研究の貴重な資料となっている。忠以と不昧が、見附の宿で偶然出会い、優雅な茶会を開いたという有名なエピソードも記されている。筆まめな忠以は、時には自らも筆を執った公用記録『玄武日記』も残している。執務の様子だけでなく、姫路城内の空間イメージも膨らむ興味深い内容だ。

ほかにも、作刀、茶杓・花筒制作、和歌、絵画……と、その才能は極めて広範囲に及んだ。弟・抱一の活躍とともに、いわば「姫路城ルネサンス」の時代であったかもしれない。

一方で忠以は、賄賂政治禁止を主張するなど、溜詰として幕閣でも重きをな

し、マルチな藩主として囑望されながら、36歳の若さで急逝する。ただ、このころから、酒井藩の財政状況が急速に悪化、嫡男忠道に代替わりしたころには、石高の5倍、73万両の債務を抱えることになる。名家老として知られる河合道臣(寸翁)が、木綿専売などで劇的に債務解消するのは、もう少し先の話である。(中元)



酒井忠以夫妻像 姫路城管理事務所蔵

姫路城略年表

西暦	元号	
1346	正平元年	赤松貞範、初めて姫山に築城すと伝える(播磨鑑)
1467	応仁元年	赤松政則、山名氏より旧領播磨を回復、姫路城を再営修補(姫路考略記)
1561	永祿4年	黒田重隆・職隆、城を改修。「姫道御構」の存在(正明寺文書)
1580	天正8年	羽柴秀吉、黒田孝高と替わり姫路城に入り、改修、築城に着手(姫路秘鑑)
1600	慶長5年	(関ヶ原の戦い)池田輝政、三河吉田より52万石で入封
1601~09	慶長6~14年	五重の大大守・三小天守からなる姫路城を構築、城下町を整備
1617	元和3年	池田光政、利隆の死去(前年)の跡を継ぐも、因幡・伯耆へ32万石で移封 本多忠政、伊勢桑名から忠刻・千姫と共に25万石で入封。船場川を改修する
1618	元和4年	本多忠政、西の丸を築き、三の丸を整備、今日見る姫路城の全容を整える
1639	寛永16年	(奥平)松平忠明、本多政勝と入れ替わりに大和郡山から18万石で入封
1648	慶安元年	松平忠弘、山形へ移封。跡に入る(結城)松平直基が死去、直矩が跡を継ぐ
1649	慶安2年	松平直矩、越後村上へ移封。榊原忠次、白河より入封
1656	明暦2年	榊原忠次、大天守の東西大柱根元部分の根継ぎと補強柱補加。
1667	寛文7年	榊原政倫、越後村上へ移封。松平直矩、越後村上より15万石で入封
1682	天和2年	松平直矩、閉門解かれるも豊後日田へ移封。本多忠国、福島より15万石で入封
1687	貞享4年	本多忠国、大天守に支柱を補加、屋根修理も行う
1704	宝永元年	本多忠孝、越後村上へ移封。入れ替わりに榊原政邦、15万石で入封
1741	寛保元年	榊原政岑、隠居。政永、跡を継ぐも越後高田へ移封。松平明矩、奥州白河より15万石で入封
1743	寛保3年	松平明矩、大天守1・2階に筋かい及び支柱を補加(傾きが止む)
1749	寛延2年	松平朝矩、前橋へ移封。入れ替わりに酒井忠恭が15万石で入封。 領内百姓が蜂起し、全藩一揆に発展。城下で大洪水が発生。好古堂開校(後移転)
1774	安永3年	酒井忠以の時、災害相次ぎ、飢饉救済のため社倉を開く
1810	文化7年	酒井忠道の時、国産姫路木綿が江戸表での専売権を得る
1821	文政4年	酒井忠実の時、国産会所を綿町に開く。仁寿山校開校
1863	文久3年	酒井忠績の時、飾磨津・福泊・家島等に砲台を築く
1865	元治2年	酒井忠績が幕府大老に就任
1868	明治元年	(鳥羽伏見の戦い)岡山藩兵が姫路に進駐、姫路城を開城
1871	明治4年	姫路藩が姫路県に、後に飾磨県となる。姫路藩邸に県庁を置く
1873	明治6年	姫路城が陸軍省管轄となる。翌年、歩兵第10連隊が城に入る
1876	明治9年	飾磨県庁を城外の薬師山へ移す。飾磨県が兵庫県に合併される
1878	明治11年	陸軍少佐飛鳥井雅古(1877年)に続き、陸軍大佐中村重遠が名古屋・姫路両城保存の意見書
1896	明治29年	陸軍第10師団が姫路に創設される
1908	明治41年	白鷺城保存期成同盟会、姫路城の保存修理を請願
1912	大正元年	姫路城(本丸・二の丸以内)の無償貸下、姫路城及び姫山公園が市民に公開される
1925	大正14年	歩兵第10連隊跡地保存のため、姫路城勝地保存期成同盟会を結成
1928	昭和3年	姫路城が史蹟に指定される
1931	昭和6年	姫路城が国宝(旧)に指定される
1932	昭和7年	国道改修、埋門~総社門の中堀埋め立て 西の丸を含む菱の門以内が公開される
1941	昭和16年	防空用擬装網を大天守第五重に装置する(翌年、天守全体に)
1945	昭和20年	7月3日の空襲で市内焦土と化すが、菱の門内は被災せず。擬装網を撤去する
1951	昭和26年	姫路城が新「国宝」に指定される
1956	昭和31年	大天守等の解体復元工事(昭和の大修理)始まる(~1964年)。姫路城跡が特別史跡に
1989	平成元年	市制100年記念行事「姫路百祭シロトピア」を姫路城跡内で開催
1993	平成5年	姫路城が法隆寺と共に、日本初の世界文化遺産に登録される
2009~15	平成21~27年	「平成の保存修理」、「天空の白鷺」(素屋根兼見学施設)公開



姫路城の一年

四季折々の姿を見せる姫路城の中で、城主はどのように暮らしていたのだろうか。江戸時代に行われていた年中行事によって、その暮らしを考えてみたい。『日本国語大辞典』によれば、年中行事とは「一年のうちで、一定の時期に慣例として行われる公事」をさす。本来は宮中で行われるものをいい、その儀礼の基盤には日本人の暮らしの中心である農耕に関わる習俗があった。宮中行事はやがて武家社会に踏襲され、武家特有の色彩が加わっていく。

江戸時代、武家の年中行事の基本となったのは、幕府が行う年中行事である。正月の三ヶ日だけを見ても、元旦には御家門・譜代大名の登城、2日には外様大名などの年始御礼、3日には御用始めと將軍の勤めは繁多であり、毎月の月次御礼、徳川家の菩提寺参拝などの他、五節句はもちろん、七草、嘉祥（嘉定）、八朔、月見、玄猪、冬至など季節ごとに数多くの行事があった。八朔は1603（慶長8）年徳川家康が江戸に入った日として重要視されたが、古くから農耕の節目とされた日である。また、諸士に菓子配る6月の嘉祥も家康ゆかりの行事とされたが、その起源は中世からある餅や菓子を供えて疫病を祓う公家の行事にあった。

諸大名家は、国元においても、江戸屋敷においても幕府に準じる年中行事を行っていたとされる。姫路藩も同様で、酒井忠以が書き残した『玄武日記』、酒井忠績の祐筆たちがまとめた『姫陽秘鑑』により、その概要を表1にまとめた。正月の若水や雑煮、初午、節分、3月の雛祭り、5月の端午の節句、7月の七夕など、我々が歳時記として親しんでいる行事も少なくない。城主も藩士たちとともに、季節の移り変わりを行事の中で楽しんだことだろう。

そうした基本的な年中行事以外では、まず城主としての勤めを挙げねばならない。將軍と同様に、正月には家臣や一門、町年寄りや大庄屋、社寺からの年始の礼を受ける日が続く。藩主にとっても、藩士にとっても、そして、領民にとっても、城における正月行事は藩政の始動を意味した。その最初を飾る行事が、儀礼的な文書を総覧に供す元旦の吉書始だった。年中行事は、君臣のきずなを再確認する場でもあったのである。

また、年中行事からは、武道の精進が藩主として大切な勤めだったこともうかがえる。1月2日には、馬の乗り初めや弓などの稽古始めが行われた。11日の鏡開きが甲冑などを飾っての具足開きとなるのは、武家ならではの。なお、年中行事ではないが、打毬を行った記録も残されている。打毬は、江戸時代に

なって鍛錬のため武家が復興した球技だった。もちろん、文化的な素養も、武道とともに重んじられた。元旦には読書始め、書初め、詠み初め、画初めがあり、茶道に造詣の深かった忠恭は1月14日に茶立初めを行っている。また、武家の嗜みであった能については、1月21日に能初めがあった。

信仰的な側面では、先祖の霊を祀る即是堂への拝礼が毎月のように行われている。池田輝政が城の鬼門に祀った長壁神社や、播磨国の総鎮守である射楯兵主神社（惣社）、城地の鬼門を守るという案内社八幡神社など、主だった神社への参拝も公式行事のひとつだった。なお、酒井氏は稲荷信仰に厚く、東御屋敷に祀った庭先稲荷へも同じように参拝している。端午の節句に忠恭が朱書の鍾馗を家臣に遣わしており、疫病を祓う習俗との関連が興味深い。この日には城主による天守拝見の儀式があった記録もあり、夏服への衣替えの日でもあった。尚武に通じる菖蒲の節句は、武家にとって深い意味を持ったらしい。

年中行事から、城主の暮らしの一端を窺い見た。多忙な日々の積み重ねは、城主の勤めの重さを示してもいよう。城主の元で働く藩士たちにとって、姫路城の一年はどんな重みを持っていたのだろうか。（埴岡）

表1 酒井家年中行事（『姫陽秘鑑』『玄武日記』参照）

月日	行事	月日	行事
1月1日	若水で髪を結う、雑煮祝、三献の祝、長壁神社・惣社・案内社八幡社・御庭稲荷・即是堂拝礼、伊勢御祓頂戴、列座以上の家臣・御身内男子より年始礼、読書初め、書初め、詠初め、画初め、吉書始め、噴籠初め、夕の祝	21日	能初め
2日	御掃除初、祝儀あり（年男が勤める）、出入りの町人年始礼、御買初め、家中年頭の礼、庭馬場にて乗初、鐘場で弓・籠・剣・長刀稽古初め	28日	登城、本丸にて月次礼、長壁神社代参
3日	御誦初、町年寄・大庄屋年頭の礼、初日のため庭に小松5本植える	2月3日	初午につき庭稲荷へ代参
4日	寺社年頭の礼 ※この日から平服、10日まで年寄非番の者出ず	11日	野里・桑原社拝礼、法華山参詣
5日	即是堂惣御霊前で拝礼、百首読む、乗馬一覽	24日	大般若転読
6日	家中役人は年越の祝儀として御盃、鬘斗祝い（一献ごとに孔雀太夫ら謡）、弓八幡囃子、島台にて盃事	28日	長壁神社代参、年寄衆らに節見舞い
7日	七種粥祝（若菜祝い）	3月2日	年寄、老女案内にて難拜見、大日河原にて弓備檢分
8日	無官の社人年始の礼、本丸にて年男が豆はやし、豆祝、御部屋様へ年頭礼	3日	雛の祝、鍛冶小屋で焼刃
9日	御内の者ら盃（七種過ぎたので雑煮なし）、喜齋門より長壁神社拝礼、案内社八幡参拝、惣社拝礼、庭稲荷拝礼、初茶	5月2日	端午の祝儀（時服を配る）
11日	姫路町等の大年寄・町医者・御用宿・年行事など拝礼、宇佐崎にて鷹野、蛭子社参、御具足御賀儀（具足ひらき祝）、御用始に付き一汁三菜、年始御膳（親戚より）、御勘定所の御帳初め、役替え、座敷廻り	5日	端午の祝儀として使者（干鯛一折）
12日	即是堂拝礼、火事行列一覽（桐の馬場にて）	6月1日	吉例氷餅
14日	年越につき親戚より使者、夕茶立初いたす（観風楼）	15日	土用の入りで親戚より使者
15日	御同姓様振舞、月次座敷廻り、御弓場初め、長壁神社・惣社より祈禱礼	16日	嘉祥（嘉定）
18日	庭にて弓始め、船場本徳寺挨拶・盃事	7月7日	七夕
		8月1日	八朔
		9月9日	重陽
		10月1日	玄猪
		12月1日	寒の入り、公儀へ在所の鯛鯉（ひしこ）壺ツケ献上
		16日	御煤納の御祝儀、歳暮の御祝儀
		20日すぎ	奉公普勤の者、出箱ノ輩に裏美、節分につき御年男廻り出る
		30日	終年の祝儀

※『玄武日記』は、1776（安永5）年、78（同7）年のものを参照した  
 ※毎月1日・15日に月次礼あり、末日にある日もあり  
 ※即是堂拝礼はほぼ毎月複数回行われ、多い月には数回に及ぶ。1月のみ記す  
 ※娯楽的な行事、慣例ではないと思われる行事も省略した

## 姫路城下町の祭礼

姫路城の鎮守、城下町の氏神としての性格を強く持つ播磨国総社・射楯兵主神社（以下、総社）では、一年をとおして多様な神事・祭礼が行われ、活況を呈していた。5月の太神楽（5日）、6月の影向祭（11日）、7月の修羅踊（13日～15日）、11月の氏人祭（15日・16日、霜月大祭）は、とりわけ城下の町々と結びついた神事・祭礼として知られていた（以上、『村翁夜話集』）。

城下町姫路を代表する祭礼として近在近国に名を馳せていたのは、現在も受け継がれている一ツ山大祭と三ツ山大祭である（兵庫県指定文化財・国記録選択文化財）。祭礼の名前は、総社の神門前に壮大・華麗な山が1基あるいは3基作られることに由来する。

江戸時代、一ツ山大祭は丁卯祭（天神地祇祭）、三ツ山大祭は臨時祭と称されていた。江戸時代には「御守護様御執行之御神事」、つまり、姫路城主（播磨国の国主）が「天下泰平・国家安全」を祈願するために主催する祭礼であった（「辛巳年（1701：元禄14年）丁卯祭執行ニ付城主へ届出ノ古文書」）。

一ツ山大祭は、祭神である兵主神が影向した6月11日が丁卯（ていぼう、ひのとう）の日であったことから、およそ60年に一度訪れる6月11日に行われてきた。丁卯の年に行われるようになるのは後のことである。三ツ山大祭は、939（天慶2）年に瀬戸内海で海賊行為を働いていた藤原純友を鎮圧するために、射楯兵主神社において臨時に行われた天神地祇祭に由来するという。その後、



伊和大明神臨時祭之画図 姫路市立城郭研究室蔵

不定期に行われていた臨時祭は、1533（天文2）年、播磨国守護赤松政村によって20年に一度と定められたと伝えている。

2013（平成25）年の三ツ山大祭は、4月1日から7日にかけて行われた。神門の前に高さ18m、底辺の直径10mの二色山・五色山・小袖山の三つの山が造られた。二色山は白と浅黄の二色の布、五色山は青・黄・赤・白・紫の五色の布を巻き、小袖山は色とりどりの小袖を飾り付ける。山の側面には、俵藤太（藤原秀郷）の蜈蚣退治など勇猛な武将の物語を題材とした人形を飾りつけ、それぞれの山に播磨国の大小明神、九所御霊、天神地祇を迎える。

祭礼の象徴となる山が登場するのは、羽柴秀吉や池田輝政が姫路城を築城する以前の1521（大永元）年のことである。この大祭の特色は、現行の祭礼風俗の中では山と五種神事をあげることができるが、かつては猿楽能、造り物、曳物、俄などがあり、祭礼の華やかさと賑わいを創出していた。御旅所である姫路城三の丸広場で行われる五種神事（競馬・弓鉾指・神子渡・一つ物・流鏑馬）は中世の播磨地方の郷村において展開していた祭礼の面影を色濃く残している。一方、町屋の屋根の上や街路には「羅生門」、「娘道成寺」、「忠臣蔵」などを題材とした造り物が飾られた。人物や背景をおよそ実物大で作り上げ、20間、30間にも及ぶ大掛かりな人形絵巻が山陽道に沿った町々20カ所ほどに展開し、祭礼の花形となっていた。

一ツ山大祭・三ツ山大祭は、娯楽性の高い造り物、曳物、俄など都市祭礼としての要素を積極的に取り込み、近在近国を代表する城下町祭礼へと発展を遂げたのである。

この他、城下町の祭礼と結びついた神社として、十二所神社、日吉神社（野里）、

案内八幡神社（現・総社境内社）をあげることができる。『村翁夜話集』によると十二所神社と日吉神社では9月9日に例祭が行われ、十二所神社で1月10日に行われる「恵美酒祭礼」は「近來参詣者多、大市ト成」とあるごとく、賑わいを見せていた。（小栗栖）



2013（平成25）年の三ツ山大祭

## おわりに

姫路城ガイドツール企画委員会委員長 志賀 咲穂



上：中ノ門筋の通り景観

下：西二階町の通り景観（那波屋本陣前から西を見る）

CG制作 兵庫県立大学永野研究室・同安枝研究室・千葉大学平沢研究室

平成 27 (2015) 年度より文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」の補助を受け、「世界文化遺産姫路城公式ガイドツール整備調査研究事業」に取り組んでいます。

初年度の平成 27 年度は、姫路城の世界文化遺産登録の主旨を確認しつつ、その存在価値を広め、地域の活性化に寄与するためのガイドツールのあり方と整備の基本的方針について調査研究を行いました。

今年度は、基本方針を踏まえつつ、具体的な成果に向けての調査研究を進めてきましたが、世界文化遺産姫路城の観光文化資源としての価値を一段と高めることを目的として、これまで地域において蓄積されてきた研究情報にもとづいた「公式」と呼べるガイドツールの整備と提供をめざし、できるだけ正しい情報を伝える「公式ガイドブック」の制作編集、最新のデジタル技術を用いたCGによって、姫路城の失われてしまった建物や城下町の姿を復元し、歴史的な情景を想起しやすくすることに取り組んだところです。

これまで姫路城に関しては公式となるガイドブックがなく、現存する天守と本丸付近の文化財に加えて、世界遺産の登録範囲である中曲輪や城下町までを解説したガイドブックが必要でした。また、城郭に関する用語など語彙の誤用が見られる点についても、標準となる表現を示しておくことが求められていました。

公式ガイドブックの制作に当たっては、方針決定を行うBOOK 部会を設け、その元に編集分科会において具体的な編集作業を行いました。本文の原稿は複数の執筆者が担当しましたが、城郭建築研究の第一人者である平井聖東京工業大学名誉教授に全体の監修をお願いしました。

制作・編集に当たり、多くの方々にご協力いただき、貴重なアドバイスをいただいたこと、深く感謝申し上げます。

## 姫路城ガイドツール企画委員会

### 委員長

志賀咲穂（兵庫県立大学名誉教授）

### 委員

伊藤康晴（鳥取短期大学非常勤講師・新鳥取県史編さん委員）

小栗栖健治（神戸女子大学古典芸能研究センター客員研究員）

永野康行（兵庫県立大学大学院シミュレーション学研究科教授）

富士本 健（姫路市立好古学園大学講師）

安枝英俊（兵庫県立大学准教授）

山本 桂（フリーランス編集者）

### 顧問

中元孝迪

（近世遺産活用事業実行委員会副委員長、兵庫県立大学特任教授、播磨学研究所所長）

### 専門委員

朝日美砂子（名古屋市秀吉清正記念館学芸員）

荒木かおり（川面美術研究所代表）

内平隆之（兵庫県立大学教授）

多米淑人（福井工業大学 FUT 福井城郭研究所准教授）

加戸啓太（千葉大学大学院工学研究科助教）

### オブザーバー

工藤茂博（姫路市立城郭研究室）

小林正治（姫路市観光交流局姫路城総合管理室）

森 恒裕（姫路市埋蔵文化財センター）

### 監修

平井 聖（東京工業大学名誉教授）

### 事務局

花幡和宏（姫路市教育委員会文化財課）

大谷輝彦（姫路市教育委員会文化財課）

## 執筆協力

家永善文（元姫路科学館館長）

多田暢久（姫路市立城郭研究室）

谷川恵一（『BanCul』副編集長、フリーライター）

藤本陽子（『BanCul』編集委員、フリーライター）

埴岡真弓（姫路市文化財嘱託調査員）

藤原龍雄（姫路市立好古学園大学講師）

松岡 健（神戸新聞社）

## 写真・図版協力

岡山大学附属図書館 書寫山圓教寺 鳥取県立博物館 長崎大学附属図書館

名古屋市秀吉清正記念館 兵庫県立歴史博物館

大谷信一 中根忠之 平井聖 本多隆将

姫路市 姫路市史編集室 姫路市埋蔵文化財センター 姫路市立琴丘高等学校

姫路市立城郭研究室 姫路市立城内図書館 姫路城管理事務所

島内治彦



## 姫路城公式ガイドブック

平成29（2017）年3月31日 第1刷発行

編集 姫路城ガイドツール企画委員会

発行 近世遺産活用事業実行委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

姫路市教育委員会生涯学習部文化財課内

TEL 079-221-2787

印刷 神戸新聞総合印刷

本文・装丁デザイン 正木理恵

※本書を無断で転載・複製使用することを禁じます。

©2017. Printed in Japan